

岩崎清信さんによる「H30卓球レポート講習会」の報告

いわき地区高体連卓球専門部・委員長 清水 聖（昌平高校）

1月14日（日）に、元全日本チャンピオンの岩崎清信さん（株式会社タマス）による「卓球レポート講習会」を内郷コミュニティーセンターで開催しました。今回で9回目（矢島淑雄さんによる1回を含めると、通算では10回目）の講習会でしたが、月刊「卓球レポート」が今年の4月号（3月20日発行）をもって休刊するとのことですので、最後の「卓球レポート講習会」となっていました。

前日の夜、いわき市内の焼鳥屋さんで「岩崎さんを囲む会」を行いました。大学入試センター試験と重なっていたこともあり、今回も参加者は5名と多くはありませんでしたが、「顧問ではあるものの卓球は専門ではない」という先生もおられ、いろいろ疑問点を投げかけられたりするなど、会は大いに盛り上がりました。長谷川信彦さん（元世界チャンピオン）の話も出てくるなど、中高生のころ、講習会などでよくお世話になった者としては懐かしくもあり、うれしくもありました。長谷川さんにはとてもかわいがっていただきました。

余談ですが、長谷川さんはかつて「卓球レポート」の副編集長をされていたこともありますので、講習会の際の一場面を紹介させていただきたいと思います。長谷川さんが打法で参考にされたのは、フォアハンドは松崎キミ代さん（元世界チャンピオン）、バックハンドは高橋浩さん（元アジアチャンピオン）、フォアハンドドライブは木村興治さん（元世界チャンピオン：男子ダブルス・混合ダブルス）と話されていました。長谷川さんは「卓球レポート」で「作戦あれこれ」というコーナーを担当されていましたが、その中で試合の戦術だけでなく、基本打法の大切さについてもよく説かれていました。例えば、講習会で「次号の『卓球レポート』に高橋浩さんのバックハンドの連続写真を入れておいたからフォームを参考にしてみてください！」などという話をされ、参考にしたものです。このように言っていたから連続写真を見るのと、届いた雑誌の写真をただ意識もせずに見るのでは大違いだったと思います。ちなみに、長谷川さんは私が所属していたスポ少（当時、福島市にありました）に2～3か月に1度くらいのペースで来られていました。技術的なことだけでなく、「親孝行の大切さ」や「感謝の気持ちを持って卓球に取り組もう」など、精神的なことまでいろいろとご指導いただき、それは今でも私の心の中に残っています。

さて、今回の岩崎さんによる最後の「卓球レポート講習会」の話に戻ります。まず話されていたことは、精神的なことです。試合に臨むにあたって、「負けてもいいというようなことは考えないことが大事」で、気持ちをきちんとつくれるかどうか、勝ち負けを左右するという話をされていました。これは普段の練習のときから、いかに「試合に負けない」という心境になれるか、あるいはそういった気持ちをつくって取り組めるかどうか、大事で、試合のときにいきなりできるものではないとお話でした。よく「試合は練習のとき

のように、練習は試合のときのように・・・」と言われますが、「普段から試合を意識していかに緊張感を持って練習に取り組めるかが大事」ということでしょう。

次に、時代をこえて大事になる技術ということで、ブロックについての技術講習がありました。「ラケットに当てるだけで相手ボールの回転を殺し、浮かせた弾道で相手コート深くに返球する」のが岩崎さんの考える理想的なブロックとのこと。水谷隼選手（全日本選手権9度優勝、リオ五輪男子シングルス銅メダリスト）もバックに攻撃された際に、このようなブロックで対処し、自ら攻撃して自滅することがないとのことでした。いわき地区の選手に限ったことではないのですが、本人はブロックをしているつもりでも、実はちょっとでもボールを叩いていて本当のブロックにはなっていないとのこと。浮いたボールは一見、相手にとってチャンスボールになるのではないかと考えてしまいがちですが、深いと打ちにくく、相手が打ちミスする可能性もあります。また、相手のドライブを何球でもブロックで相手コート深くに返球し長いラリーになると、相手も疲れてきますので、浮いたボールを打ちミスする可能性はますます高くなります。まずは、「本物のブロック」をマスターし、簡単にミスしない（つまり、自滅しない）ようにすることです。

午前中にもう1つ、「サービスからの判断を養う練習」を行いました。サーブ権があるとき、自分がサービスを出す際、「相手の上半身を漠然と見る」ことで、逆を取られなくなるとのこと。逆を取られないようにするためによく「相手のラケットを見るのが大切」などと言われたりしますが、実際にはなかなか難しいようです。それよりも、逆を取られないようにするために、相手の上半身の使い方をよく理解しておく、つまりフォア側に打つとき、バック側に打つとき・・・で、体の向きがまったく同じということとはなかなかないことですので、それを試合を進めていく中でしっかりとつかんでおくようにしましょう。それにより、競った場面も含めて試合の中で逆を取られることはなくなるとのこと。それにより、競った場面も含めて試合の中で逆を取られることはなくなるとのこと。それにより、競った場面も含めて試合の中で逆を取られることはなくなるとのこと。

昼休みを挟んで、午後はまず、「レシーブについての考え方」を教えてくださいました。「レシーブは基本的に順回転で返球し、レシーブの際の失点は仕方ないとして、レシーブミスは絶対にしない」ということをベースにおくと良いとのこと。岩崎さんの現役時代の考え方は、「レシーブの際、2割得点できれば良い」、「レシーブは相手の回転を利用して返球し、自らフリックしたり、強くツツキをしたりするなど余計なことはしない」の2点に集約されるようです。サービスからの得点力やラリー戦に持っていけば負けられないという自信があつたことでしょう。現役選手では、例えば水谷選手もレシーブは基本的にストップが多く、その後、ラリーに持って行って得点につなげているケースが多いとのこと。

技術講習の最後に、いわき地区の選手の昼休み中の練習の様子を見ていて、岩崎さんは「卓球台から下がって打つ選手が多いのが気にかかる」と話されていました。例えば、レシーブが浮くなど、相手にチャンスボールを送った場合でも、すぐに台から下がらず前で対応し、相手に時間的な余裕を与えないようにすると、相手はすごく嫌なものだとおっし

やっていました。さらにもう1つ、「9オールなど、競った場面で使える打法を身につけよう！」とお話いただきました。競った場面で使える打法とは、「打つ、叩く、弾くのではなく、ボールを掴（つか）むような感覚」で打つことです。ラケットとボールの接触時間を長くし、糸を引くようなボールを打てるようにしておくと、競った場面でも怖くなくなるということです。岩崎さんという、やはり強烈なフォアハンドドライブのイメージが強いですが、今回に限らず、ずっと講習会で話を伺ってきて、実戦を通して、「どうしたら勝利に結びつけられるか」を第一に考えて技術力を高められてきたということ強く感じます。例えば、過去にお話いただいたことでは、「自分にできないことや試合で使わない技術は捨てる」ということも理にかなっていると思いますし、その中に含まれることでしょう。今回参加されたみなさんも、「どうしたら自分の技術を向上させることができるか」、「どうしたら勝利に結びつけられるか」ということをよく考えて日ごろの練習に取り組んでみましょう。これまで、岩崎さんからいろいろと教わってきましたが、それを普段の練習の中でどう活かして、実戦での勝利に結びつけていけるかが大事になると思います。それぞれの目標に向けて、岩崎さんから教わったことが少しでも自分のものになるよう、しっかりがんばってください。

最後になりますが、「卓球レポート講習会」の前日の夜、岩崎さんを焼鳥屋さんにご案内する道中、「タマスが伊藤繁雄さん（元世界チャンピオン）との契約を打ち切ることになった」という話をされていました。「卓球レポート」では、長く「技術」というコーナーを担当され、国内外のトップ選手のさまざまな技術を細かく分析されており、また、「ドライブ強打（基本編・応用編）[伊藤さん、長谷川さん、齋藤清さん（全日本選手権8度優勝）が出演]」というビデオで分かりやすく解説されていたのが思い出されます。先に記した私が所属していたスポ少にもたまに指導しに来られることがありました。岩崎さんから話を伺い、時代の流れを感じずにはいられませんでした。やはり時代の流れなのでしょう。「卓球レポート」休刊にともなう最後の「卓球レポート講習会」。岩崎さんには長きにわたり大変お世話になりました。いわき地区高体連所属の選手の大会結果を気にかけていただき感謝申し上げます。また、新たな形でご指導いただいたり、選手として活躍されていた当時のお話を聞かせていただいたりする機会があれば幸いです。本当にありがとうございました。

